対象のエリア 阿蔵町、宇連野町、高野町、梨野町

阿蔵 自治区プラン

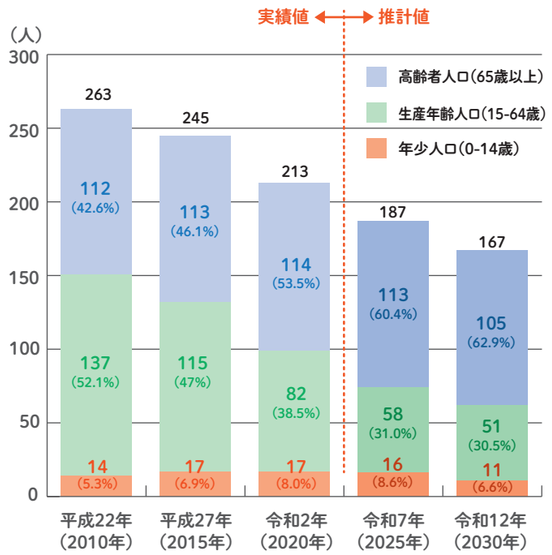
❶ 阿蔵自治区の現状

人口の減少、特に子どもや若い人の減少

- 令和2年の人口は213人であり、この10年間で50人減少しています。65歳以上の高齢者人口はほぼ横ばい、14歳以下の年少人口は少し減っていますが、15歳から64歳の生産年齢人口は大きく減少しています。
- この傾向が今後も続くと、令和12年の人口は167人とさらに減少し、特に生産年齢人口がさらに半数程度に減少、高齢化率は62.9%になると予想されます。

人口減少と高齢化が地域に及ぼす影響

- 住民の減少と高齢化に伴い、自治区や組の運営などの担い手不足、農地の荒廃、空き家の増加、移動の不便さや買い物の困難さなどが心配されています。
- 子どもの人数が少なく、子どもを見守る人や場所も少なくなることが懸念されます。



年齢別人口のこれまでの推移と今後の推計

※各年 10 月 1 日 年齢は学齢
（実績値は住民基本台帳、推計値は豊田市下山支所の推計）

❷ 阿蔵自治区の10年後の将来像

- ▼ 組の合併やお役の見直しを行いながら、地域の活動が適正な規模で実施されています。
- ▼ 様々な活動グループや「かえで」の運営も続いており、住民同士のつながりが続いています。
- ▼ 念仏踊りなどの地域の文化が次世代に引き継がれて継続されています。
- ▼ 空き地や遊休農地、空き家は住民の協力により活用され、新しい住民に提供されています。
- ▼ 農地や山林は、住民同士が協力したり、地区外の人や企業に協力してもらったりするなどにより守っています。
- ▼ 阿蔵での地区の情報が取りまとめられ、阿蔵への転入者や転入を希望している人に情報が提供できる状態になっています。

❸ 阿蔵自治区の5年間の取組

取組1 4つの組を合併する（阿蔵・宇連野・高野・梨野を1つの組にする）

阿蔵自治区では、各組ともに人口減少・高齢化が激しく、組の役員の担い手が少なくなっているため、組の運営が既に難しくなっています。このため、将来的に 4 つの組を合併し、阿蔵自治区を 1 つの組として運営していきます。なお、組の合併にあわせて、役員、神社や祭礼、共有財産の今後のあり方についても検討し、次の世代に引き継いでいきます。
また、長期的には、他の自治区との合併や連携についても検討していきます。

取組2 住民の繋がりを強化する（地域活動の継続）

阿蔵自治区では、地域の活動を通じた住民同士の繋がりができています。人口が減少するなかでも、産直のかえでや念仏踊り、三番叟など、現在行われている地域活動を継続します。こうした活動を通じて、大人から子どもまで幅広い年代が接することにより、地域への愛着を高めて、より強い住民の繋がりを作ります。

取組3 関係人口・移住者を増やす（空き地・空き家活用、受入態勢づくり）

阿蔵自治区を持続させていくためには、子どもが住み続けたり U ターンで戻ってきたりするだけではなく、新しい住民を受入れていくことが必要です。このためには空き家・空き地を活用・提供する必要があることから、空き家を把握したり、各家で将来の土地や住宅について考えたりしていきます。
あわせて、阿蔵の暮らしについての情報が提供できる状態になっており、移住者や関係人口を地域で受け入れるための体制づくりを行います。

対象のエリア 大沼町

大沼自治区プラン

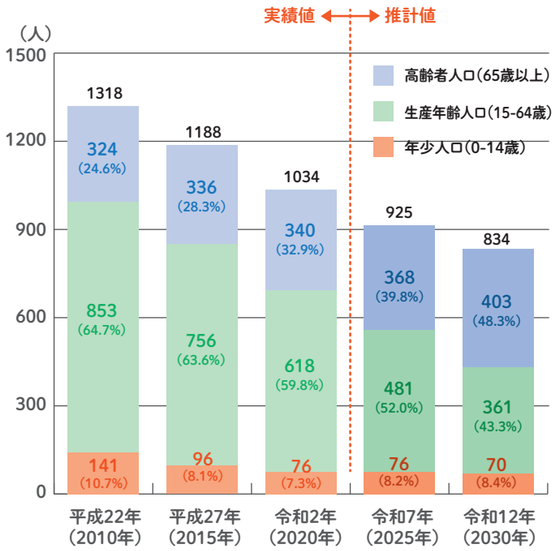
❶ 大沼自治区の現状

人口の減少、特に子どもや若い人の減少

- 令和2年の人口は1,034人であり、この10年間で284人減少しています。14歳以下の年少人口、15歳から64歳の生産年齢人口は大きく減少し、65歳以上の高齢者人口は増加しています。
- この傾向が今後も続くと、令和12年の人口は834人とさらに減少し、年少人口、生産年齢人口の減少、高齢者人口の増加は進み、高齢化率は48.3%になると予想されます。

人口減少が地域に及ぼす影響

- 子どもの減少により、大沼小学校では一部の学年で複式学級になっています。また、高齢化に伴い、地域の運営・行事などの担い手の減少、ひとり暮らし高齢者や介護世帯の増加、空き家・空き地の増加などが懸念されます。
- 住民アンケートでは、獣害、高齢者の暮らし、子どもの減少などが心配ごととして多くあげられています。



年齢別人口のこれまでの推移と今後の推計

※各年 10 月 1 日 年齢は学齢
(実績値は住民基本台帳、推計値は豊田市下山支所の推計)

❷ 大沼自治区の10年後の将来像

- ▼ 空き家や空き地、農地などが適切に管理され、美しく整備された景観が広がっています。
- ▼ 多くの空き家や新たな宅地が定住のために提供され、地域のコーディネートのもと、下山出身者が、いつまでも暮らし続けたり、地区外からも多く転入したりして、地域に溶け込んで暮らしています。
- ▼ 高齢者が地域の一員としての役割を果たし、多くの人とコミュニケーションをとることができる環境の中で安心して生き生きと暮らしています。
- ▼ 子どもや子育て世帯が自らまちづくりに参画し、地域の一員として生活したり、地域住民と交流したりすることで、地域の子どもとして健やかに成長していくことのできる自治区となっています。
- ▼ 誇れる大沼の歴史や文化、伝統を継承するため、伝統芸能を子どもに伝えるとともに、史跡や美しい景観などが整備され、多くの人が訪れることで、区民の誰もが「WE LOVE 大沼」の気持ちを育んでいます。
- ▼ 子どもたちに胸を張ってつなぐことのできる大沼づくりを推進するため、定期的にまちづくりについて検討する場を開催し、未来の大沼について考える機会を持っています。
- ▼ 自治区外に転出した人たちも、いつまでも大沼が大好きで、機会のあるごとに大沼との関わりを持ち続けています。

❸ 大沼自治区の 5 年間の取組

取組1 各家の住宅等の未来を考えるとともに、定住人口の確保を推進する
～地域の環境(空き地・空き家・農地)の適切な管理と地域の維持・活性化のために～

空き家や空き地を放置されると地域環境に悪い影響を及ぼすとともに、所有者にも心配事や負担となります。空き家や空き地の活用は、問題を解決する一つの方法と考えます。また、活用は、大沼の定住人口の確保にもつながります。活用には、各家の将来について家族みんなで話し合い、5年、10年後を考えた準備をしていくことが大切になります。自治区として、各組や集落の実情に合わせ、住民が安心して暮らせて且つ活気のある地域となることを目標に取組を行っていきます。

取組2 高齢者が地域の一員として、生き生きと暮らし続けられる地域づくり
～高齢になっても安心して暮らし続けられるために～

高齢者人口の増加が見込まれる中、高齢者が暮らしやすい地域づくりが急務となっています。自治区として、高齢者の見守りや声掛けを地域ぐるみで行うとともに、地域の一員としての役割を提供したり、インターネットを活用するなどでつながりを創出したりして、高齢者の暮らしの充実を図ります。

取組3 子どもや子育て世帯が地域の一員と感じることのできる地域づくり
～若い世代の定住性を高め、子どもの元気な声が聞こえる大沼をめざして～

持続可能な地域にするためには、子どもや子育て世帯が増えることが重要です。そのため、子育て世帯の思いをまちづくりに反映できる仕組みをつくるとともに、地域と子ども、子育て世帯がつながることのできる機会を創出します。また、地域学校共同本部等との連携を深め、子育て環境の充実を図ります。

取組4 誇れる大沼の歴史、文化、スポーツ等や美しい景観を次世代に継承する
～「WE LOVE 大沼」の深化、継承をめざして～

地域への愛着を深め、暮らすことに誇りを持てる大沼とするため、先人の培ってきた歴史や文化、伝統を継承するための取組を進めるとともに、美しい景観を継承するため、環境整備や植栽の充実を図ります。また、自治区外の方へのおもてなし環境を整備し、区民が大沼の良さを再確認できる機会をつくります。

取組5 持続可能で未来につなぐ大沼まちづくりの推進
～現在、そして未来の地域課題解決をめざして～

子どもたちに胸を張ってつなぐことのできる大沼づくりを推進するため、大沼まちづくり部会を定期的に開催し、地域課題の洗い出しや解決に取り組みます。また、関係団体等との調整を図りながら未来の大沼のまちづくりに向けた事業計画の立案や推進を図ります。

令和3年度 (2021年度)	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)

❶ 各家の住宅等の未来を考えるとともに、定住人口の確保を推進する
①空き家、空き地調査、空き家予想マップの作成
②「大沼住民の生活・暮らしのルール」の作成
③空き家、財産管理、資産活用に関する勉強会の実施、相談窓口の紹介
④移住者、地区外の人達との交流会、意見交換会の実施

❷ 高齢者が地域の一員として、生き生きと暮らし続けられる地域づくり
①インターネットを使った交流
②高齢者の共通趣味グループづくり、集まれる場所づくり
③認知症サポーター養成

❸ 子どもや子育て世帯が地域の一員と感じることのできる地域づくり
①子育て世代の保護者の思いや願いを地域につなげる仕組みづくり
②「思いや願いを聞く会」から「話しやすい会」への展開
③安心・安全につながる見守り活動の地域全体への呼びかけ

❹ 誇れる大沼の歴史、文化、スポーツ等や美しい景観を次世代に継承する
①史跡を利用した小規模な公園化整備
②子どもから高齢者までが一日中楽しめるイベントの開催
③道路周囲の環境美化
④中心地のシンボル的な景観整備

❺ 持続可能で未来につなぐ大沼まちづくりの推進
大沼まちづくり部会の定期的な開催

対象のエリア 蘭町、黒坂町

三巴自治区プラン

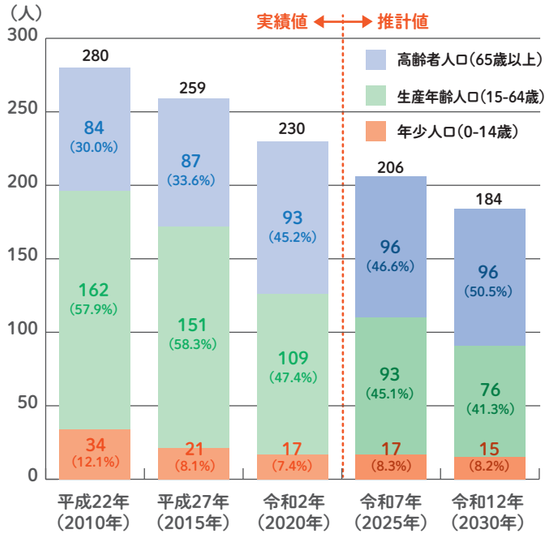
❶三巴自治区の現状

子どもや若い人の減少、高齢化率の増加

- 令和2年の人口は230人であり、この10年間で50人減少しています。14歳以下の年少人口、15歳から64歳の生産年齢人口が減少し、65歳以上の高齢者人口が増加しています。
- この傾向が今後も続くと、令和12年の人口は184人となり、年少人口、生産年齢人口の減少は続き、高齢化率は50.5%になると予想されます。

高齢化が地域に及ぼす影響

- 住民の減少と高齢化に伴い、地域の運営や行事などの担い手が少なくなっています。外からも多くの人が訪れていた三巴の朝市も、現在では、廃止されています。
- 若い世代の移住世帯も地域に溶け込みながら暮らしていますが、子育てや子どもの通学などにおいて不便を感じてきている人もいます。



年齢別人口のこれまでの推移と今後の推計

※各年 10 月 1 日 年齢は学齢
(実績値は住民基本台帳、推計値は豊田市下山支所の推計)

❷三巴自治区の10年後の将来像

- ▼ 地区外に転出した人達とも、良好な関係が築かれており、関係人口が維持されています。
- ▼ 空き家や空き地は増えていますが、放置されることなく、移住者用の住宅などとして活用されています。
- ▼ 隣近所のあいさつや会話が日常的に行われ、支え合いや見守りなど暮らしの安心が感じられています。
- ▼ 若者の定着や移住が進み、子育て世帯にとって住みやすい地域になっています。
- ▼ 外の人の力も借りながら農地や山林が守られており、農業や林業の担い手となる人も出てきています。
- ▼ 郡界川沿いの河津桜を育む活動が多くの人の参加により行われており、春には花見に訪れる人が増えています。
- ▼ ホタルが生息しやすい環境づくりが続けられおり、初夏にはホタルが飛び交う風景が見られています。
- ▼ 自治区や組の運営・行事は、少しずつ形を変えながら、次の世代に引き継がれています。
- ▼ 巴太鼓などの伝統芸能やお祭りなどの行事が守り続けられており、子どもや高齢者、地区外に転出した者にとっても「三巴の誇り」となっています。

❸三巴自治区の 5 年間の取組

取組1 定住・移住を促進して人口の維持を目指そう

定住者と地区外に転出した者の交流の機会を確保し、Uターン者の増加や関係人口の維持のために花見・夏祭りなど交流事業を継続して実施します。また、移住者を増やすための空き家・空き地の発掘を継続的に実施します。

取組2 子育て世代の母親・女性同士の交流の場をつくろう

転入者や嫁いできた方など、地域との交流の機会が少なく、地域に溶け込むことや情報を得ることが困難になっています。地域の行事や今ある仕組みを活用しながら交流の場を作ります。

取組3 農地や山林を継続的に維持管理しよう

地区内には多くの農地や山林があります。健康づくりのためにも農業・林業を継続的に実施します。特に農地に関しては、イノシシ、シカ、サルなどの獣害対策を重点的に取り組みます。

取組4 自然の良さを守り、育てよう

自然環境の良さを守るため、引き続き草刈りや環境整備を継続します。また、郡界川沿いに植栽された河津桜を手入れし、さらにホタルやササユリなどを増やす環境づくりを進めます。

取組5 地域活動の維持や発展に取り組もう

お祭りや巴太鼓などの伝統行事や農林業や地元料理などの地域の知恵を大切にし、地区外の方の助力を受けながら、後世に受け継ぐように保存活動を行います。

令和3年度 (2021年度)	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)
❶ 定住・移住を推 進して人口の維持を目指そう				
花見や夏祭りなど交流事業の継続				
空き家・空き地の発掘				
❷ 子育て世代の母親・女性同士の交流の場をつくろう				
サロン状況確認	サロンの周知			
地域の祭礼の機会を活用した交流の実施				
❸ 農地や山林を継続的に維持管理しよう				
メッシュ・電気柵の設置の推進				
ワナ資格取得の推進・オリの設置				
❹ 自然の良さを守り育てよう				
河津桜の手入れの継続 草刈(年2回)、剪定(3年おき)、支障木確認(隔年)				
ホタルの視察	現状調査	カワニナ育成	ホタル育成	ホタルの保護
❺ 地域活動の維持や発展に取り組もう				
活動の見直し	廃止、継続、新規の振り分け			
お祭り(巴太鼓も含む)など伝統文化の継承				

対象のエリア 立岩町、田平沢町、栃立町、東大林町、平瀬町

田平沢自治区プラン

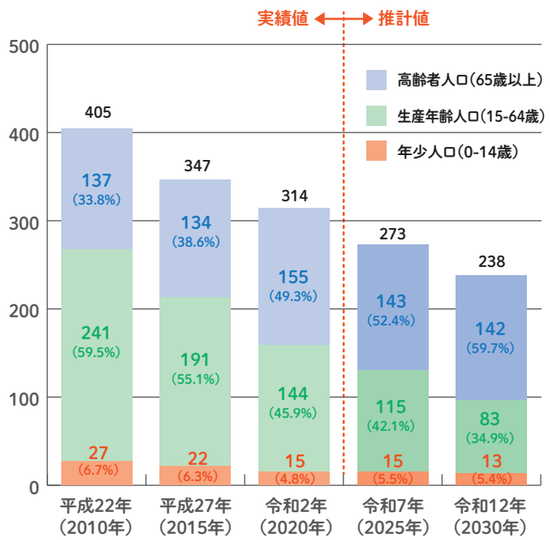
1 田平沢自治区の現状

人口の減少、特に若者世代の減少

- 令和2年の人口は314人であり、この10年間で91人減少しています。14歳以下の年少人口、15歳から64歳の生産年齢人口は大きく減少し、65歳以上の高齢者人口は増加しています。
- この傾向が今後も続くと、令和12年の人口は238人とさらに減少し、年少人口、生産年齢人口の減少は進み、高齢化は59.7%になると予想されます。

人口減少、高齢化が地域に及ぼす影響

- 田平沢自治区は東西に長く広がり、集落が点在していることから、自治区民相互の交流が気軽にでき難い環境にあります。このような地域性もあり、住民の減少と高齢化と共に、次の世代の担い手不足も重なり、地域の運営や行事などに支障が生じる恐れがあります。また、今後のひとり暮らし高齢者の増加、介護世帯の増加などが懸念されます。



年齢別人口のこれまでの推移と今後の推計

※各年 10 月 1 日 年齢は学齢
(実績値は住民基本台帳、推計値は豊田市下山支所の推計)

2 田平沢自治区の 10 年後の将来像

- ▼ ひとり暮らしの世帯は増えていますが、気軽に集まれる場所があり、孤独になる人はいません。
- ▼ 自治区内では、誰もが楽しめるイベントが定期的に行われ、みんなが生き生きと活動しています。
- ▼ 進学・就職・結婚などで外に出ていった人も、盆の帰省時には地域みんなで集まり、地域とのつながりが維持されています。
- ▼ 地域の環境整備を通して、田平沢自治区の景観を美しく保ち、訪れる人にも田平沢の豊な自然と美しい景観でもてなします。
- ▼ 地域の若い世代の自治区活動への参加がされており、自立した自治区運営が継続されています。
- ▼ 自治区や組の運営、行事やお祭りは、少しずつ形を変えながら、次の世代に引き継がれ、存続しています。

3 田平沢自治区の 5 年間の取組

取組1 住民同士のつながりづくり

地域の人が気軽に集まっておしゃべりをする機会が少なくなり、近所同士の繋がりが希薄になっています。そのため、自治区内で自主活動グループを立ち上げ、いつでも集まれる場を作るとともに、自治区内での活動を活発にし、住民同士の交流を深めます。

取組2 田平沢転出者との関係づくり

自治区が開催するイベントには、転出した子どもや孫が多く参加し、地域に定期的に戻ってきてくれます。今後もこの繋がりを維持する取組を定期的に行います。このように転出しても地区外から地域活動に参加し、田平沢を支えてくれる人を増やしていきます。

取組3 地域活動による景観維持

高齢化により、田畑を管理することが困難になり耕作放棄地や空き家が増えることが懸念されます。住民一人ひとりが財産管理に対する意識を高め、将来的に荒地や空き家になることを未然に防ぎます。また、もみじ街道や巴川沿いの環境整備を住民同士で協力して継続的に行うことで、地区外から来訪される方も魅了する田平沢にしていきます。

取組4 自治区運営を次世代に引き継ぐためのあり方検討

自治区や組、行事や祭りの担い手の高齢化が進んでいます。人口減少の他、若手の自治区活動参加が少ないことで、担い手がいなくなることが懸念されます。自治区行事や祭りを次世代へ継承していくためにも、今後の自治区運営のあり方について検討していきます。

令和3年度 (2021年度)	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)
1 住民同士のつな がりづくり				
「笑母会」を続ける、活動を伝える、参加者を増やす			「笑母会」と「おっさんずクラブ」が一緒にやる活動をやってみる 子どもや若い世代も参加できることを考える	
「おっさんずクラブ」を結成して、活動を始める、続ける				
2 田平沢転出者との関係づくり				
夏まつり実行委員会により企画検討する お試しの小さな企画でやってみる お試しの結果を企画に反映させる		田平沢とつながる人に広く呼び掛けて、おまつりを開催する (大きなイベントにするより、続けることを大切にする)		
		田平沢小学校閉校 20 周年記念イベントの開催を検討する		
3 地域活動による景観維持				
主要道路沿いの定期的な景観整備、空き家・空き地の調査協力、自治区で協力した田んぼの維持管理による景観維持				
4 自治区運営を次世代に引き継ぐためのあり方検討				
現在の行事・お役などの見直し検討 必要性や課題を再確認する		自治区・組の在り方についてのアンケート調査・分析	現在の自治区プランを進捗管理する 次の自治区プランを考える	
自治区まちづくり部会を立ち上げる			アンケート結果に基づいた運営のための準備	

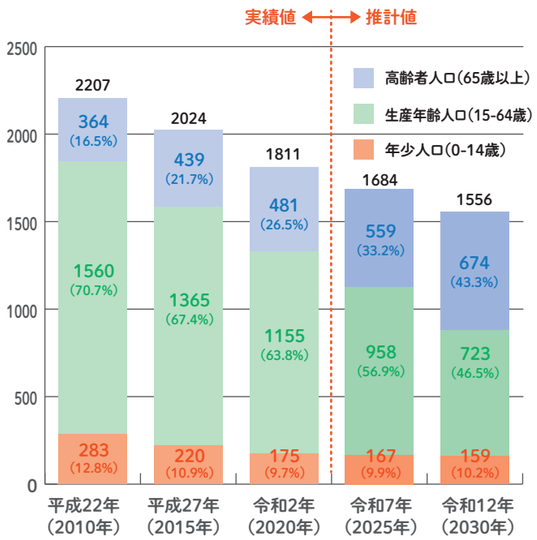
対象のエリア 蕪木町、下山田代町、田折町、花沢町

花山自治区プラン

① 花山自治区の現状

人口の減少、高齢化の進行

- 令和2年の人口は1,811人であり、この10年間で396人減少しています。14歳以下の年少人口、15歳から64歳の生産年齢人口は大きく減少し、65歳以上の高齢者人口は増加しています。
- この傾向が今後も続くと、令和12年の人口は1,556人とさらに減少し、年少人口、生産年齢人口の減少、高齢者人口の増加は進み、高齢化率は43.3%になると予想されます。



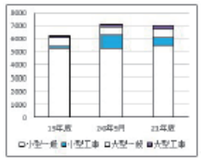
年齢別人口のこれまでの推移と今後の推計

※各年 10 月 1 日 年齢は学齢
(実績値は住民基本台帳、推計値は豊田市下山支所の推計)

人口減少の影響と住民の心配ごと

- 住民の減少、特に子ども・子育て世代の減少により、花山小学校の児童が減少しています。
- 地域への愛着は感じているものの、自治区活動への関心が薄く参加率が低迷しています。
- 令和元年8月の住民アンケート調査では、子どもの遊び場、買い物の不便さなどが挙げられています。
- 特に、テストコースの本格稼働により、交通量の増加に伴う交通事故、交通渋滞の増加が心配されています。

国道301沿い(花沢町)の工事車両の台数予測(日当り往復台数)



- 小型車(作業員通勤)は減少の見込み。
- 大型車(ダンプ等)は若干増加の見込み。
- 2023 年12月頃まで大型車:200台/日(往復計)程度の見込み

② 花山自治区の10年後の将来像

▼ 移住者の受け入れが盛んになっており、地域ぐるみで空き家や遊休地活用の意識が高まっています。
▼ 子どもやお年寄りが、安心感をもって暮らしやすい地域となっています。
▼ 自治区活動の意識が向上し、防災訓練などの自治区行事に積極的に参加する人が増えています。
▼ 周辺地域や地区内事業所との情報交換の場が設けられ、良好な関係が築けています。
また、テストコース本格稼働による交通渋滞緩和などへの対策を協力して行っています。
▼ 周辺地域や事業所・従業員との交流やイベントが行われ、新しい賑わいもできています。そうした取組をきっかけにして、花山への転入者が増え、若い人や子どもも増えています。

③ 花山自治区の5年間の取組

取組1 地域をあげた移住者の受け入れ態勢と受皿づくり

人口減少が進む中、今後の自治区活動を維持するためにも、移住者を受け入れ、地域活動の担い手につなげる取組が急務になっています。そのため、移住者を地域の一員として受け入れる土壌と、受皿となる空き家の発掘を進める必要があります。また、移住後の生活サポート体制を整えるなど、地域をあげて移住者を受け入れる態勢と受皿づくりに取り組んでいきます。

取組2 子どもやお年寄りが集える場所づくり

自宅以外で子どもが遊ぶ場所、高齢者が過ごす場所が求められるため、自治区内にある集いの場の掘り起こしと周知を行います。また、地区内の子どもと高齢者を集めた三世代交流イベントを実施し、集いの場を創出します。さらに、自治区活動の拠点となる区民会館(仮称)建設に向けての検討を行います。

取組3 区民が自治区活動に参画したくなる地域づくり

暮らしやすい地域づくりを推進するためには、区民が自治区活動を理解し、活動へ参画しながら自治区を盛り上げていくことが重要です。そのため、自治区活動の啓発と区民の意見を伝えやすい場を提供するとともに、自治区活動をサポートする仕組みや区民による主体的な活動意識を育てる仕組みを創出します。また、自治区備品の貸出を見える化し、区民の地域活動支援や非常時の共助体制を整えます。

取組4 周辺地域、地区内事業所との関係づくり

自治区の更なる発展のためにも、周辺地域や地区内事業所との関係性を密にすることが求められています。このため、相互の情報交換の場や、共同作業による景観整備などを通じて互いに信頼関係を築き、安全で活気あるまちづくりを進めて行きます。

令和3年度 (2021年度)	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)
① 地域をあげた移住者の受け入れ態勢と受皿づくり				
受入勉強会の検討及び開催 ／ 空き家発掘及び啓発活動				
移住後の生活サポート支援の検討及び実施				
② 子どもやお年寄りが集える場所づくり				
集いの場の洗出し・検討	集いの場の周知 活用方法周知	新たな集いの場や区民会館の検討		
イベント部会設置 イベント内容検討	三世代交流イベント			
③ 区民が自治区活動に参画したくなる地域づくり				
区民意見の目安箱準備 花山版わくわく事業準備 備品貸出制度及び 非常時の共助体制準備	目安箱運用 ／ 花山版わくわく事業運用			
	区民集いの場準備	区民集いの場実施		
	備品貸出啓発及び非常時の共助体制運用			
ちょこっとパートナー募集				
④ 周辺地域、地区内事業所との関係づくり				
事業所との関係構築 顔合わせ・意見交換 アンケート等	交通インフラ整備、充実 ／ 獣害、草刈等協働実施など			
	社会学習支援の充実、交流の場創出			

対象のエリア 大桑町、野原町、羽布町

羽布自治区プラン

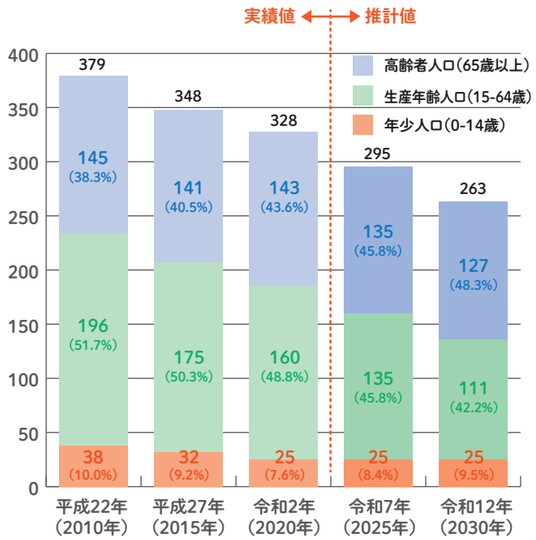
❶ 羽布自治区の現状

人口の減少、特に若者世代の減少

- 令和2年の人口は328人であり、この10年間で51人減少しています。特に、15歳から64歳の生産年齢人口は大きく減少しています。
- この傾向が今後も続くと、令和12年の人口は263人に減少し、生産年齢人口の減少はさらに続き、高齢化率は48.3%になると予想されます。

人口減少・若者の減少が地域に及ぼす影響

- 住民減少と若者世代の減少に伴い、地域の運営や行事などの次の世代の担い手が少なくなるとともに、農地や山林の管理も困難になっています。また、今後のひとり暮らし高齢者の増加、自動車を運転できない人の移動手段の確保、空き家の増加などが心配されています。



年齢別人口のこれまでの推移と今後の推計

※各年 10 月 1 日 年齢は学齢
(実績値は住民基本台帳、推計値は豊田市下山支所の推計)

❷ 羽布自治区の10年後の将来像

- ▼ 高齢者は増えていますが、ご近所同士の世代を超えた交流や助け合いが盛んです。
- ▼ 高齢者も含めて、みんながパソコンやスマートフォンを使えるようになり、暮らしが楽しくなっています。
- ▼ 地域の防災施設が充実し、災害に備えた住民の意識も高まっています。
- ▼ 住宅や農地の将来を地域全体で考えるようになり、空き家や遊休農地が様々な方法で活用されています。
- ▼ 子どもや子育て世帯にとって、暮らしやすい地域になっています。
- ▼ 古くからの住民、移住者、その他の羽布と関わりのあるに人も含めて、みんなで親睦を深めたり交流する機会が生まれており、羽布の関係人口は増えています。
- ▼ 景観の整備などにより三河湖の魅力が高まり観光客も増え、住民と観光客がふれあう機会もできています。
- ▼ 地域の仕事などを見直していくことにより、若い世代の担い手が増え、祭りや行事は存続・継承されています。外に住む人も地域の仕事や行事の運営などに協力してもらっています。

❸ 羽布自治区の5年間の取組

取組1 定住・移住の促進(空き家活用、移住者受入の仕組みづくり)

地域が守りたい景観や祭り(伝統)の継承など、皆が楽しく安心して暮らせる地域づくりを目指して、空き家の活用や移住者の受入体制を整えます。各家庭で住宅の将来を考える仕組み、空き家を活用しやすくする仕組みをつくるとともに、移住者が地域に溶け込みやすくするための取組を行います。

取組2 住民同士の支え合い体制整備

地域住民が安心して暮らし続けられるように、災害時などにおいても住民相互の助け合いがスムーズにできるような体制を整えます。地域の高齢者世帯や一人暮らし世帯に対して無理なく見守りを行うような活動や互いに助け合いを行うような活動を進める仕組みづくりを行います。

取組3 農山村の魅力や景観の維持・向上

生活環境の維持(住みよい環境)や地域の活性化のために、農地・山林や道路・水路を地域共有の財産として地域で草刈や清掃等を行い、共同で管理するなど、地域の景観を維持・管理する取組を行います。
また、観光資源を有効活用するとともに、地域の観光事業者と連携を強化しながら、地域で実施可能な事業(WRC や鯉のぼりの掲揚など)を検討し、実施していきます。

取組4 自治区運営の維持・改善(次世代に引き継ぐためのお役や行事の再編)

このまま高齢化が進み、若者は減少すると、お役を担える人が固定化し、地域の活動が維持できなくなることが懸念されます。今後もお役や地域行事を次世代に引き継ぐために、現状把握を進めるとともに、実施方法の見直しや自治区の運営体制の在り方を検討します。

令和3年度 (2021年度)	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)
❶ 定住・移住の促進(空き家活用、移住者受入の仕組みづくり)				
住民アンケートの実施	住民向け説明会・勉強会の実施・羽布自治区「暮らしの作法」の作成			
空き家の発掘				
❷ 住民同士の支え合い体制整備				
組単位での見守り活動・住民の困りごとを住民で解決				
災害時の連絡体制を確立				
❸ 農山村の魅力・景観の維持・向上				
道水路等(共用部)の維持管理				
地域資源(農地、山林、観光施設等)活用型法人の設立・運営				
❹ 自治区運営の維持・改善(次世代に引き継ぐためのお役や行事の再編)				
各自治会の現状把握	役員構成のあり方検討・組統合に向けた施策			
各組行事継続と新規事業の掘り起こし				

対象のエリア 神殿町、小松野町、和合町

和合自治区プラン

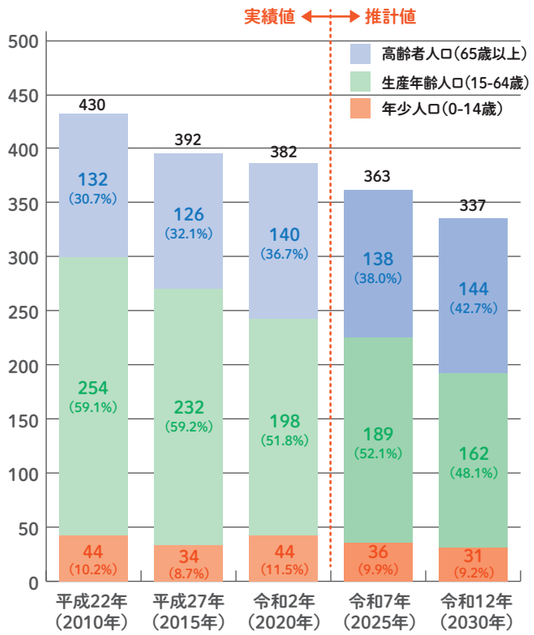
① 和合自治区の現状

人口の減少、特に子どもや若い人の減少

- 令和2年の人口は382人であり、この10年間で48人減少しています。15歳から64歳の生産年齢人口は大きく減少しています。
- この傾向が今後も続くと、令和12年の人口は337人とさらに減少し、特に、生産年齢人口の減少がさらに進み、高齢化率は42.7%になると予想されます。

人口減少が地域に及ぼす影響

- 住民の減少と高齢化、特に高齢者のみの世帯が増加していますが、地域のコミュニティにより、地域の運営や住民どうしの支え合いが機能しています。また、空き家や空き地は増加していますが、活用しようとする機運が高まりつつあり、移住者への提供なども行われ始めています。



年齢別人口のこれまでの推移と今後の推計

※各年 10 月 1 日 年齢は学齢
(実績値は住民基本台帳、推計値は豊田市下山支所の推計)

② 和合自治区の10年後の将来像

- ▼ 高齢者は増加しますが、寝たきりにならず、心も体も元気よく過ごしています。
- ▼ 地域内での見守り、支えあいが負担なくほどよい距離感でできています。
- ▼ 地域の人達が、気軽に触れ合うことが出来る機会が設けられています。
- ▼ 年齢問わず、女性が活躍し。地域の運営にも参画しています。
- ▼ 地域による子育て世代の女性がのびのび活躍できるように、まどいの丘を活用した情報交換の場づくりを進めています。また、女性が働ける場所の検討や要望を行っています。
- ▼ 地震などの大きな災害が発生しても、手ぶらで速やかに避難できるような体制づくりと日頃からの気構えができています。
- ▼ 空き家・空き地の活用がしっかりとされており、移住者が増加しています。
- ▼ イベントや特産品、シンボルを通じて、地区外との交流が盛んに行われています。
- ▼ 人口が減少するなかでも自治区や組の運営を見直し、次の世代に引き継がれ、存続しています。

③ 和合自治区の5年間の取組

取組1 みんな生き生き まめ(健康)になりん【健康増進】

60・70・80は働きざかり、心も体も前向きにしまいか!

取組2 お互いに見守り、チョット助けあえたら安心だらぁ【助け合い】

声をかけ合い、知り合い、和み合い、助け合うまいか!

取組3 「女性が元気は、家庭も元気、地域も元気」だがん【女性活躍】

迷わず、ためらわず、自分の命は自分で守らまいか!

取組4 早めの避難が安全じゃん【防災対策】

女性が楽しく、積極的に活動できる地域にしまいか!

取組5 組・自治区を振興しまいか【自治振興】

明るく楽しく元気な地域を維持し、発展させまいか!

令和3年度 (2021年度)	令和4年度 (2022年度)	令和5年度 (2023年度)	令和6年度 (2024年度)	令和7年度 (2025年度)
① みんな生き生き まめ(健康)になりん				
前向きに健康寿命を延ばすまい				
健康寿命の講演会	家庭体操・歩き方教室	歩け歩け大会の開催、自治区だより発行(毎年)		
ふれいあいで「生き生き」生活 「地域ふれあいサロン」「自治区ふれあいサロン」開催、「お助け隊」の創設				
② 住民同士の支え合い体制整備				
あいさつからご近所ネットワークづくり 自治区だより「あいさつ運動」(毎年継続)				
緊急時連絡先一覧の作成	配布と更新(毎年)			
班を中心とした「近助(近所)」の活動	意識づけ、活動状況把握と普及活動(毎年)			
③ 「女性が元気は、家庭も元気、地域も元気」だがん>				
女性の視点で女性ならではの活動 女性のリーダー発掘・女性懇談会の促進・自主活動グループの育成(毎年)				
子育てと仕事が両立できる環境整備 対象女性に意見聴衆と実現に向けての環境整備の計画、実行促進(毎年)				
④ 早めの避難が安全じゃん				
避難場所(まどいの丘)設置の防災倉庫の管理維持 防災委員会と自治区組役員による管理維持計画と備蓄(毎年)				
防災関連資料の作成と更新				
作成・整備	毎年更新			
班中心の「近助」の体制づくり				
体制づくり	意識づけ、活動状況把握と普及活動(毎年)			
実際的な防災訓練の計画・実行				
訓練計画作成	住民参加の防災訓練の実施(毎年)			
⑤ 組・自治区を振興しまいか				
定住・移住・交流促進 住み続ける取組・空き地空き家発掘・自治区紹介情報発信(毎年)				
移住者の活躍支援 (地域産品づくり、地域外との交流活動)(毎年)				
道路整備(生活道路)、農地・山地の維持管理 もみじ街道整備、各組のシンボルつくり(神殿町さくら公園、和合の里文字) 地域運営機構の再検討 (毎年)				